

甲斐と河内と馬

末木 健

はじめに

- 1. 地名
- 2. 古代氏族

3. 国司等

- 4. 馬と甲斐
- まとめ

はじめに

甲斐は急峻な山々に囲まれた国で、万葉集にも「なまよみの甲斐」と歌われるほど、彼の世とこの世をつなぐ、気のこもれる国として、古代の都の人々から遠い存在であった。しかし、一方では『古事記』『日本書紀』には、ヤマトタケルの東征伝説にあるように、ヤマト朝廷の前進基地として『酒折の宮』が置かれた記事が見えるなど、4世紀～5世紀の一時期には畿内の勢力が及ぶ最も東に位置していた可能性のあることが、考古学的な資料でも確認されている。

その最大の遺跡は、東八代郡中道町にある国指定史跡「甲斐銚子塚古墳」であり、4世紀後半の前方後円墳としては、東国最大規模を誇っている。また、近接する同町の大丸山古墳は、銚子塚古墳に先立つ4世紀中葉に比定されるが、石室内部からは最古式の鉄製短甲や手斧など、大陸での製品と判断される貴重な出土品があり、東日本における4世紀での甲斐国の政治的・軍事的役割の高さを示している。

また、近年にはその中道町東山2号方形周溝墓の溝から、4世紀末の土器と同じ地層に馬の歯や骨が出土し、続いて甲府市塙部遺跡SY3・SY4方形周溝墓の溝からも4世紀後半代の馬歯が出土したことで、大陸からの馬の導入が全国でも遅く甲斐国にもたらされた可能性が高まった。

この背景には、大陸における西晋の滅亡と五胡十六国時代の始まりや北魏の建国、日本軍の朝鮮半島南部への進出など、軍事的な緊張があり、畿内大和政権は馬の軍事的な活躍を目の当たりにしたであろう。それが、日本での本格的な馬の飼育の導火線となったことは想像に難くない。

甲斐の馬は大陸から直接甲斐へ搬送されたことは有得ないことであり、韓半島から北部九州、西日本、畿内を経由して甲斐に至ったと考えるのが当然ではないかと思っている。畿内からは東海道か東山道を経由して甲斐に至るのが通例であると思われ、『記紀』における前述のヤマトタケル伝承でも、これらの道が東征や帰路の道として記述されている。

ところが、近年、山梨の4世紀代における土師器の観察から、東海系の土器だけでなく山陰・北陸系の土器が多数出土することが分ってきた。このため、甲斐への馬の伝播ルートが①東海道、②東山道—甲斐、③北陸道—東山道—甲斐の3つのルートを考える必要ができた。

また、大陸からの馬の伝来については『日本書紀』応神天皇15年8月条に、百濟王から良馬2匹が献上され、その馬を輕（奈良県橿原市大輕町付近）の坂上の厩で養ったという。更に、履中天皇の時には河内飼部（かわちのうまかい）の記事が『日本書紀』にみえ、馬氏の本拠地である河内国古市郡において馬飼部が設置されていた。馬に関する『記紀』の記述では雄略天皇や欽明天皇の代が最も多く、とりわけ『甲斐の黒駒』は雄略天皇の時世に名高い。

「甲斐の黒駒」伝承や馬の飼育に関わる渡来系氏族の田辺史氏、馬史氏等が奈良時代に甲斐国司として赴任するなどのことから、甲斐国と馬と河内国の関係はそれだけ取り上げても興味ある関連が導き出せるのではないかと考え、ここでは『地名』『氏・人』『国司』『馬』などについて甲斐と河内との関連性について述べ、その意味を探ってみたい。

1. 地名

甲斐は山深い国であり、主に弥生時代後期になって甲府盆地内部やその周辺が開発されて水田が開かれた。従って、古墳時代の甲府盆地では盆地東部から東南部にムラや初期の大古墳が多く、次いで盆地北部から西部に後期のムラや古墳があり、八ヶ岳山麓や県東部の大月市・上野原町では後期のムラや古墳が散見するにすぎない。このような甲斐国の発展地図は、坂本美夫によって評・里（郡・郷）の成立とからめて説明されている（坂本美夫 1983「甲斐の郡（評）郷制」『研究紀要』1 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター）。

『和名抄』によれば山梨の古代郡・郷地名は下記の通りである。郡・郷の地名の由来には「土地や地形」から命名されたものや、「人・氏族・集團」などに関わるもの、「仕事や用途」に関わるもの等が想定されるが、その多くは根

拠が不明であるので、ここでは名称をあげるにとどめる。

甲斐国郡郷名

- ・山梨郡（東部） 於曾（おぞ） 能呂（のろ） 林部（はやし） 井上 玉井
- ・山梨郡（西部） 石禾（いさわ） 表門（うわと） 山梨 加美（かみ） 大野
- ・八代郡 八代 長江（ながえ） 白井 沼尾（ぬまのお） 川合（かわい）
- ・巨麻郡 等々（どうどう） 速見（へみ） 栗原 青沼 真衣（まきの） 大井 市川 川合 余戸（あまりべ）
- ・都留郡 相模（さがむの） 古郡（ふるごおり） 福地（ふくち） 多良（たら） 賀美 征茂（せも） 都留（つる）

次ぎに、河内国の古代郡・郷は下記の通りである。

河内国郡郷名

- ・錦部（にしごり）郡 余戸・百済
- ・石川郡 佐備・紺口・雑居・大国
- ・古市郡 新居・尺（？）度・坂本・吉市（八上（やかみ）郡）
- ・安宿（やすかべ）郡 賀美・尾張・資母（しも）
- ・大県（おおあがた）郡 鳥坂・鳥取・津積・大里・巨麻（式内社大泊神社）・賀美
- ・高安郡 坂本・三宅・掃守・玉祖
- ・河内郡 英多・新居・桜井・大宅・豊浦・額田・大戸
- ・讚良（さらら）郡 山家・甲可・枚岡・高宮・石井
- ・茨田（うはらた）郡 幡多・佐太・三井・池田・茨田・伊香・大窪・高瀬
- ・交野（かたの）郡 三宅・田宮・園田・岡本・山田・葛葉
- ・若江郡 弓削・刑部・新治・巨麻・川俣・錦部・余戸（郡下に式内社弓削神社・矢作神社）
- ・渋川郡 竹淵・邑智・余戸・跡部・賀美（郡下に式内社許麻神社）
- ・志紀郡 長野・拝志・志紀・田井・井於・邑智・新家・土師
- ・丹比（やじひ）郡 依羅・黒山・野中・丹上・三宅・八下・田邑・菅生・丹下・土師・狭山

甲斐と河内の2国に共通する郡・郷名は「巨麻」「賀美」「資母」である（*余戸は除く）。このうち、「巨麻」は河内国に郷名として2郡に見え、「賀美」郷も郷名として3郡に見える。「資母」は「しも」と読み甲斐国の大留郡「征茂」郷と共に、「上・下」の関係を示したものと思われ、漢字表記を慶賀な文字を使い2字としたものであろう。

「巨麻」は高句麗に由来する事が閔晃氏（閔晃 1959 「甲斐の帰化人」『甲斐史学』7）により既に説かれている。河内国大県郡巨麻郷・若江郡巨麻郷は、いずれも高句麗系渡来氏族大泊連（泊造）の本貫地であることから、甲斐の「巨麻郡」も高句麗に由来するという説は定説となっている。

る。なお、甲斐国の大留郡の成立時期は文献上不明ながら、多くの高句麗系渡来人の居住によって成立したとすれば、高句麗の滅亡（668）前後に日本に亡命した人々の移住によって成立し、しかも、馬飼育に長けた人々であったことが、8世紀以降の甲斐の牧の成立に大きな影響を与えたことは想像に難くない。この牧の成立が、4世紀末以来の山梨・八代地域の小牧の統一・移設につながってもいただろう。

なお、河内国の式内社と同名の神社は『延喜式』甲斐国では八代郡の弓削神社がある。この神社は現在西八代郡市川大門町に所在するものであろう。『日本後記』には「甲斐国巨摩郡弓削社」の記載があり、市川郷は「和名抄」で「巨麻郡」に属していることから、のちに郡の領域に変化があったものと推定されている。

このように、同名の郡・郷である「巨麻」などは高句麗の氏族を命名の根拠とし、甲斐と河内の関係を高句麗・泊氏を間につなぐことが可能であるが、「賀美」「資母・征茂」などは地理的な関係を表すことが多く、甲斐と河内を直接つなぐものか判断は困難である。「弓削神社」は弓削連など同族に關わる神社であり、河内からの出自を想定するに十分であろう。なお、笛吹市一宮町の「上矢作・下矢作」の地名も河内を本貫とする「矢作造・連」との関わりを想定できるが、次に説明する様に甲斐国の中矢作部は都留郡を本拠地としている。

2. 古代氏族

次に甲斐国の中古代氏族と河内氏族との関係を見たい。氏族・部民の名は①王・妃・王子等の名や宮号を付したもの、②職業内容を名称としたもの、③中央氏族の氏族名を付したものに分けられる。甲斐国には①に日下部、三枝部（直）、小長谷部、壬生部があり、②に矢作部、丈部、倭文部、弓削部が存在又は想定される。③は物部、大伴部、丸部、当麻部、漢人部・上村主（直）がある。これらの管理者や支配者が河内国にかかわりある部を抽出すると以下の通りである。

○ 日下部（日下部直）

『古事記』開化天皇段に「甲斐国造が中央氏族である日下部連と同祖」とされており、甲斐国造の氏族と見られている（閔晃 1965 「甲斐国造と日下部」『甲斐史学』）が、同書仁徳天皇段には、天皇の子の大日下王・若日下部命（『日本書紀』では大草香皇子・草香幡棱皇女）兄妹のために大日下部・若日下部を置いたとされる。草香幡棱皇女は雄略天皇の皇后となり、雄略天皇が5世紀後半に皇后の草香幡棱皇女（くさかのはたびのひめみこ）の所領として最終的に設定・確立したと見られている。仁徳天皇陵の大山古墳、雄略天皇陵（丹比高鷲原陵）は河内国に比定されており、日下部連の本拠も河内国との関わりが強いと考えられる。

なお、雄略天皇=草香幡棱皇女=日下部連=甲斐国造という結びつきは、雄略天皇13年9月条の雄略天皇と甲斐の

黒駒伝承からも、甲斐=黒駒=雄略天皇という構図で補強されている。

ちなみに慶雲2年（705）2月に姓日下部連を賜わった日下部意卑麻呂は河内国河内郡の人である。なお、甲斐の日下部については、正倉院宝物の調庸白縁金青袋の墨書銘に「甲斐国山梨郡加美里日下マ□□□ 一匹 和銅七年（714）十月」とあることから、山梨郡に日下部が置かれていたことが確認される。

○矢作部（やはぎべ）

職業をその姓とした氏族で、都留郡にその本拠を置いた。都留郡散仕矢作部宮麻呂が『正倉院文書』天平宝字5年（761）12月23日付甲斐国司解に見え、『日本三代実録』貞観14年（872）3月20日条に都留郡大領矢作部宅雄と少領矢作部每世に矢作部連を賜姓したことが見える。中央伴造は矢作連・矢作造があり、河内国（若江郡）を本拠地とした。また、河内国若江郡には式内社矢作神社が鎮座する。

現在の笛吹市一宮町に上矢作・下矢作という地名がある。貞治3年（1364）の一蓮寺寺領目録に「矢作郷」と初見される。古代からの地名かは明らかではないが、この地は国府・国衙・国分寺などの地名に近く、古代の職業部である矢作部が置かれたと推定する研究者もいる。

○弓削部（ゆげべ）

弓の製作、梓弓の製作と進上を職業とする部である。文献には甲斐の弓削部はないが、甲斐（八代郡）・河内・近江に弓削神社が存在する。河内国では若江郡に弓削郷が置かれ、弓削神社がある。弓削部の中央伴造は河内国を本拠地とする弓削連であり、弓削宿弥は河内国若江郡・同国渋川郡加美郷などに本拠地を置く。

○丸部（わに）

『正倉院文書』天平宝字5年（761）石山院奉写大般若経所解に巨麻郡栗原郷の丸部（わに）千麻呂が見える。和珥臣は大和国添上郡の和邇を本拠とする氏族である。

なお、丸部と出自が異なるが、西文（かわちのふみ）氏（河内書）の祖とされる王仁（わに）は伝説上の人物で、「古事記」では和邇吉師（わにきし）と記され、百濟より論語・千字文をもたらした。「日本書紀」応神15年に渡來した阿直岐（あちき）の推薦で、翌年渡來して皇子の師として諸典籍を講じたという。西文氏は河内国古市郡を本拠とし、支族に馬・藏・高志（こし）・栗栖などがあり、東漢（あずまのあや）氏とともに文筆を業とした。

○漢人部（あやひとべ）・上村主（かみのすぐり）

東漢氏は漢人部の管理者で、上村主は地方的管理者といわれている。「漢人部」については巨摩郡栗原郷漢人部町代・千代の名前が正倉院文書の天平宝字5年（751）12月24日「甲斐国司解」に見える。漢人部は渡來系氏族ではなく、渡來系技術氏族である東漢氏を養うための日本の農民であり、技術者集団のために生産活動を行っていた可能性もあるといわれる。

「東漢氏」は大和国高市郡檜前（ひのくま）を本拠とした氏族で、応神天皇20年に渡來した阿知使王（あちのおみ）

を祖とする有力豪族といわれる。漢人は朝鮮半島からの渡来人で、「雄略16年に漢部を集めて伴造を定めたとあり、欽明元年にも帰化の漢人を国郡に安置した」『日本書紀』とあるのは、各地の渡來人を東漢氏に支配下にいた経過を示したものである。5世紀末～6世紀中葉の渡來人は「今來漢人」（いまきのあやひと）と呼ばれた。

また、「類聚国史」卷54の入部に節婦として天長6年（829）10月19日条に甲斐国の上村主万女（かみのすぐりよろずめ）が見える。

なお、上村主の中央に置ける本拠地は河内国大県郡賀美郷で、甲斐国山梨郡加美郷との関わりについて、大隅氏は強い興味を示している（大隈清陽 2004『山梨県史』 通史編1 第4章第6節「ヤマト政権と甲斐」 山梨県）。

3. 国司等

文献に見える奈良時代の甲斐国守は13人を数えるが、この中には渡來系氏族の出身者が多いといわれている。中でも河内国と関わりが深いのは、田辺史氏と馬史氏、葛井氏である。

○田辺史広足（たなべのふひとひろたり）

「天平3年（731）12月、甲斐国守田辺史広足が身体が黒く髪尾は白い神馬を献上したところ、朝廷は大瑞に当たるとして天下に大赦し、孝子らに賑給し、馬を獲た者に位階を進め、国司ら関係者の恩賞し、更に甲斐国は庸、馬を出した郡は調庸とともに免除するという恩典を下している。」（県史・資料編3より）

田辺史氏の祖先に田辺史伯孫（雄略9年7月）『日本書紀』がいる。伯孫は河内国飛鳥戸郡の人で、「その女が古市郡の書首（ふみのおびと）加龍の妻となって児を生んだので、聟の家に賀して月夜に還る途中、誉田陵の下で、赤駿にのった人にあった。ところがその馬は異体蓬生、殊相逸発であったので、伯孫は己の馬と換えて帰り、明日、その馬を見ると土馬に変わっていた。そこで怪しんで誉田陵に求めると、己の馬が土馬の間にあったので、再び取り換え帰ったという。」『日本書紀』

この逸話は埴輪馬の起源伝説として有名であるが、一方、伯孫の一族が馬に関心の高いことを示したものとしても有名で、同じ渡來系の書首と親戚関係にあったことも示している。

田辺史氏は河内国安宿（あすかべ）郡資母（しも）郷（現在の大阪府柏原市国分寺田辺一帯）に本貫を置く渡來系氏族で、田辺史氏は後に上毛野公（かみつけのきみ）と改氏姓する。原正人氏は「田辺史氏の一族は百濟より渡來して河内国に本拠し、もっぱら馬飼いの技術をもってヤマト政権に奉仕してきた渡來系技術集団の一族と見なされる。田辺史広足が甲斐守に選ばれた最大の理由もここにあったのであり、広足もよくその出的環境を自覚し、甲斐国行政の事始めにその手腕をアピールしようとはかったのではないかろうか。」（原正人 2004『山梨県史』 通史編1 第5章第4節「奈良時代の甲斐国司」 山梨県）と言う。

○ 馬史比奈麻呂

田辺史氏の10年後に国司に任命された国司で、天平13年12月10日に補任した。

馬史氏は河内国古市郡に本拠を置いた一族で、王仁の後裔氏族の一つである。その氏名の通り、田辺史氏と同様、馬の飼育にかかわりの深い一族である。王仁は書首の祖とも記され、『新撰姓氏録』には「武生宿禰。文宿禰同祖。王仁孫阿波古首之後也」とある。武生連は天平神護元年(765)の記録により、馬歎登(馬史)史の一族であり、文宿禰氏と同族で田辺史氏と関係が深いことが分かる。田辺史氏と馬史氏は甲斐國の馬生産の増加対策を実現するために派遣された可能性が高いと見られている。

○ 葛井連道依と恵文

葛井連道依は『続日本紀』宝亀9年(778)3月10日条に「正五位下葛井連道依を少将とす。勅旨少輔・甲斐守故の如し」とみえ、甲斐の国に直接赴任しない遙任国司であった。この葛井連は元は白猪史氏といった。これは養老4年5月に葛井連を賜ったもので藤井とも書き、のちに河内国志紀郡長野郷藤井寺の地に本拠した百済系渡来氏族である。

道依以前にも甲斐と葛井連一族とのかかわりは深く、国守ではないが甲斐国府の官人として赴任していた葛井連恵文がいる。天平勝宝4年(752)年4月以前に甲斐国から貢上された正倉院宝物の太狐児面袋白絶裏の墨書にある「□正八位葛井連恵文」である。この銘文は当初姓が不明であったが、末木(末木健 1986「甲斐巨麻郡の成立と展開」『研究紀要3』山梨県立考古博物館 山梨県埋蔵文化座相センター)や平川(平川南「正倉院調庸_墨書銘文—甲斐国関係一小考『山梨県史研究』8)の研究によって「葛井」である蓋然性が高まった。平川氏は「恵文」を中央から派遣された国医師と推定している。

葛井氏の中には造東大寺司など寺院や写經関係者が多い。恵文は息子の「広往」を優婆塞(在家の仏教信者)として政府に貢進していることから、やはり仏教関係の職業であった可能性もある。折しも天平13年(741)は聖武天皇による「国分寺創建の詔」の発布された年であり、天平宝字5年(761)に国守として赴任した山口忌沙美麻呂に先んじて、国分寺造営のために派遣されていた可能性も否定できない。

また、韋崎市中田小学校遺跡から「葛井」と墨書された9世紀前半代の土師器杯が出土し、人物の葛井と地名の藤井の関連性も想定されるに至っている。

4. 馬と甲斐

① 馬の伝来

大陸からの馬の伝来については『三国志』魏志倭人伝に「牛馬なし」とされることから、考古学的には4世紀末~5世紀初頭と考えられている。

山梨県甲府市塩部遺跡、中道町東山北遺跡の低墳丘墓の周溝から4世紀後半の馬の歯が発見されている。また、隣

県の長野県でも5世紀中葉の馬骨が多数出土している。これらは全国的にも古い例である。馬具の古い出土例では4世紀末または5世紀初頭の年代が想定されている福岡県老司古墳などがあり、金属製轡以前には骨や皮製の轡等が存在した可能性が指摘されている。

したがって、3世紀代に日本に牛馬が存在したかは不明ではあるものの、4世紀後半には乗用として馬が列島に持ち込まれ、逸速く甲斐国に持ち込まれたことは明らかで、その飼育にあたり渡来人がきたことも当然のことと思われる。

馬の渡来については、『日本書紀』応神天皇15年8月条に百濟王から牡牝各1疋ずつの駿馬が送られ、これが文献上の馬の渡来になる。また、有名な4世紀末から5世紀は朝鮮半島での高句麗との戦が頻発し、高句麗の好太王碑文には西暦391年、400年、404年、407年百済と倭の連合軍が高句麗と戦い半島に攻め込むが、大負けしていることが記されている。この敗因の一つに、倭軍の歩兵と高句麗軍の騎兵の差があったといわれている。

そこで、大和朝廷は馬の飼育に積極的になるわけで、最初は九州や畿内周辺の大和地域や河内地域に馬飼や小牧を設定し、飼育に力を入れたのであろう。また、「古事記」「日本書紀」での135件の馬の伝承的記述も、仁徳天皇の時代から敏達天皇の時代に集中し、特に雄略天皇の項では、記述の35%を占めるという。

雄略天皇の馬に関する記述の中でも、甲斐の黒駒に関する記述は有名で、大工の棟梁である韋那部真根が、下着だけをつけた采女の相撲に気を取られ、振り下ろした斧の刃を欠いたことが、雄略天皇の怒りに触れ、刑場に送られたときに、命を助ける使者を乗せた甲斐の黒駒が疾駆して命を取り止めたという逸話で、「ねば玉の 甲斐の黒駒鞍着せば 命死なまし 甲斐の黒駒」という歌が残る。

恐らく、4世紀から5世紀にかけては畿内周辺で小牧が置かれ、小規模ながらもそこで子馬の出産・飼育を積極的に展開したり、東国の大規模な馬の飼育を行っていたものと思われる。しかし、畿内の生業が活発になると、畿内周辺での大規模な馬の飼育は困難となり、8世紀初頭までには東国に大きな牧が移され、生産の中心が東国に移されるようになったのかどうか。

なお、畿内の馬飼についての記録は『記紀』に多い。まず、河内馬飼については次のような記述がある。

- i 『日本書紀』履中天皇5年9月壬寅の条に天皇が淡路島に狩をした日に、河内飼部(かわちうまかいべ)らが駕に従って、轡につける手綱を執った。
- ii 『同』繼体天皇元年正月の条 河内馬飼首荒籠
- iii 『同』同23年4月紀 近江の毛野臣の従者として 河内馬飼首御狩
- iv 『同』同24年9月紀 河内母樹馬飼首御狩(讚良郡枚岡郷が本貫といわれる)
- v 『同』欽明天皇22年紀 河内馬飼首押勝
- vi 『同』天武12年(683)9月紀 川内馬飼造

vii 『同』 同年10月紀 婆羅羅馬飼造、菟野馬飼造が連の姓を賜る。河内国讚良郡に本貫を置く。

この他に倭馬飼部があり、その他山城国の八坂馬飼造(天平5年)、讃岐国寒川郡に馬飼が置かれていた(和銅5年)こと、播磨国賀古郡に馬飼造(天平神護元年)、筑紫国馬飼臣(雄略天皇23年)などの記述があるが、河内と大和が初期の馬飼の中心地であったことは間違いない。『延喜式』馬飼戸の条には国別戸数が示されており、次のような数となる。

左右馬寮飼戸の分布（直木孝次郎氏作成）

	右京	山城	大和	河内	攝津	美濃	尾張	合計
左馬寮	0	6	40	108	0	3	9	166
右馬寮	3	5	49	51	16	3	0	127
計	3	11	89	159	16	6	9	193

② 聖徳太子と黒駒伝説

『扶桑略記』『水鏡』『聖徳太子伝暦』などに「聖徳太子が諸国から貢上させた善馬のうち、甲斐の黒駒を神馬として認め、試乗により富士山の上まで飛行した」という聖徳太子の「甲斐の黒駒」伝説は、甲斐国と太子との少なからぬ関係から出た可能性がある。というのは、甲斐国と壬生直の関係からである。甲斐には壬生部が置かれていたことが『日本三代実録』元慶6年(882)11月条に記され、そこには「甲斐国巨麻郡の人、壬生直益成とその子女7人の本籍を山城国愛宕郡に移す」とある。

「壬生部」は「乳部」とも書き、皇子の養育のために置かれたもので、『日本書紀』推古天皇15年2月に「壬生部を定む」とあり、6世紀以降に設置されたものと考えられている。なお壬生部が皇位継承予定者としての厩戸皇子(聖徳太子)のために設置されたとする見解がある。『日本書紀』では厩戸皇子の長男の山背大兄王が上宮乳部を領有していたことから、7世紀前半の壬生は上宮王家と密接な関係があったといえる。

また、壬生直益成が甲斐国巨麻郡の人であったことも、「聖徳太子と甲斐黒駒」の伝承の背景となる馬の飼育と関係して見ると興味深い。恐らく6世紀には設置された壬生直が、巨麻地域において牧経営を開始し、軍事用として馬の飼育を行って、その中の駿馬を厩戸皇子(聖徳太子)に献上したのが伝承となったのではないか。ちなみに、聖徳太子墓は大阪府南河内郡太子町太子の磯長谷古墳群中に所在し、太子の墓として蓋然性が高いという評価がある。

なお、明治大学教授吉村武彦氏は平成16年11月6日に山梨県立文学館の講堂での講演会で、田辺史広足が献上した馬を大瑞として評価し、大赦の事務的な中心人物「治部卿徒四位上門部王」が、聖徳太子ゆかりの人物であれば、「甲斐の黒駒」の故事にかこつけて、高い評価と恩賞も首肯できるのではないかという、想定を述べている。

③ 軍馬としての利用

大化の改新の後、675年の壬申の乱での大海人皇子の軍にいた「甲斐の勇者」が騎馬兵であったことは、その記述から推定することが出来るが、甲斐の勇者は騎馬兵という

だけでなく馬の飼育に長けた集団の一員であったと思われる。また、6世紀～7世紀の甲府盆地を取り巻く古墳群からは馬具が多数出土することからも、甲斐の馬生産の高さを推定することが出来よう。なお、馬具の出土は駿河、信濃をはじめ東国などで出土量が多い。

④ 牧の出現

大化改新以後、天智天皇の7年に近江国に牧を開いた記事があり、西暦700年、文武天皇4年3月17日条に「諸国をして牧地を定めて牛馬を放たしむ」という記事があるが、これが令制の牧の初見と言われている。なおこの7年後、慶雲4年(707)3月には23ヶ国に「官」の字の焼印を配ったことが記されている。

令制の牧が甲斐国にあったかどうかは不明であるが、柏前牧と真衣野牧が令制の牧であった可能性はあると推定されている。というのは、穂坂牧が「栗」の焼き印を持つことが延喜式に残され、前二者の牧は記録が失われているからである。これは前者の両牧が「官」の焼き印を使用していることが了解事項のため、記載が漏れた可能性があるという。

川尻秋生氏はこの両牧を「弘仁式」(820年成立)にすでに記載されていたと考えて(川尻秋生 1999「御牧制の成立」『山梨県史研究』7号)、両牧が令制の牧であった可能性を指摘している。令制の牧は「官」の焼き印を使用していたが、甲斐の穂坂牧や信濃の望月牧が「官」以外の焼き印を使用しているのは、9世紀後半から10世紀はじめに新しく設置された勅旨牧であったことが原因であったと推定している。

では、甲斐の牧はどのような場所に存在したのだろうか。延喜式の御牧は柏前牧、真衣野牧、穂坂牧があり、穂坂牧は現在の笛吹市穂坂町、真衣野牧は武川村牧の原に比定されているが、柏前牧は高根町樅山、小淵沢町～長野県富士見町の柏平・柏尾、勝沼町柏尾など諸説がある。

しかし、甲斐国内に御牧以前の馬の飼育場所が存在したこととは、次に述べるような記録に明らかであり、長屋王邸出土木簡の「甲斐国馬司」の墨書や、『正倉院文書』駿河国正税帳に記載された御馬部領使の山梨郡散事小長谷部麻佐と従者の記事から、8世紀前半には馬にかかる職の存在と、飼育をした牧の存在を想定できる。

小長谷部については、『駿河国正税帳』天平10年(738)に御馬部領使の山梨郡散事小長谷部麻佐と小長谷部練麻呂が見えるが、御馬部領使は馬の扱いになれた人物と考えてもよいだろう(原正人 1995.3「奈良時代の甲斐国司」『山梨県史研究』3)。この記事以前には、長屋王邸出土木簡に甲斐国馬司が出土し食米を受けている記述があり、この木簡年代が和銅4年(711)～靈龜2年(716)の間に収まることから、奈良時代初めには既に甲斐国から都に馬司が出土していたことが明らかとなった。なお、『続日本紀』神護景雲2年(768)には八代郡の人で小谷直(おはっせのあたい)五百依の名が見えるので、小長谷部の管理者は山梨郡に居住していた可能性がある。

奈良時代の甲斐の牧が何処に置かれていたのかは、名称も場所も明らかではないが、①6世紀の馬具出土古墳群と関係が強いこと、②壬申の乱に活躍した「甲斐の勇者」が、国司や郡司層と関係があること、③軍団とのかかわりから国府に近い場所を想定することができること、④御馬部領使の存在などを考えると、山梨郡・八代郡下に存在した可能性を否定することはできない。

これらの牧は、律令の初期には山梨・八代両郡下に設置したものの、和名抄の郡・郷の制定時代には既に山野の開拓によって、牧から耕地へと転換を余儀なくされ、牧は本格的に巨麻郡へ移されたものであろう。

まとめ

甲斐と河内と馬の関係について述べてきたが、その多くは既に知られていることであり、耳目に新しいものではない。しかし、河内と甲斐の関係は今まで見てきたように深い関係があり、文献に見える以上の関係が隠れていると思う。

河内国は5世紀の倭王権の象徴として仁徳天皇陵と言われる大山古墳や履中天皇陵とされるミンザイ古墳などがある百舌鳥古墳群や、応神天皇陵といわれる葦田御廟山古墳、仲哀天皇陵と言われる岡ミサンザイ古墳等がある古市古墳群などの大規模な前方後円墳や円墳・方墳等の陪塚があり、しかも河内国は馬飼部の中心地であることは既に述べた。これらの古墳群や周辺の南河内郡美原町の黒姫山古墳、藤井寺市野中古墳、堺市大塚山古墳などからは大量の冑や短甲や挂甲、武器が出土しているので、このことからも馬と倭王権は密接な関係にあったことは言うまでもない。

さかのぼって、4世紀中葉には鉄製短甲としては最古級のものが山梨県中道町大丸山古墳から出土し、古墳の東側200mほどの台地上に4世紀後半に造られた東山北遺跡2号低墳丘墓の溝から馬の歯などが出土したことは、倭王権との早い結びつきを照明するのに十分な資料であろう。

なお、5世紀の山梨県三珠町大塚古墳や豊富村王塚古墳からは短甲や挂甲が出土しているが、挂甲は騎乗で着用する甲冑であり、5世紀後半の山梨県中道町下曾根のかんかん塚古墳（茶塚）からも、挂甲と蒙古鉢型の冑や山梨最古の馬具が出土しており、これ以外の甲冑出土例からも、倭王権の軍事的な影響下に甲斐国が置かれていたことが明らかである。このように、古墳時代の甲斐と河内両国つながりは、既に述べたように律令国家の中へも脈々とつながり、古代社会で強化されていったのではないかと思う。